

特集

中世都市・上ノ国を行く



3城館の光跡を追って

本州が中世の室町時代だった頃、^{えぞがしま}夷島^{かみのくに}(※)の上ノ国では、
三つの城館^{じょうかん}が時をまたいで存在し、アイヌと和人が共に暮らしていた。
海を越えてもたらされた陶磁器を愛でつつ茶を嗜み、信仰のある暮らしを営んでいた。
江戸時代後期には地元で瓦が焼かれていたことも明らかになりつつある。
中世からのまぶしい光跡を追って上ノ国を歩こう。



●旧笹浪家住宅 / 上ノ国町字上ノ国236 ☎0139・55・1165。10:00～16:00、4月第2土曜～11月第2日曜まで開館。月曜休館(祝日の場合は翌日休館)および祝日の翌日休館。大人300円、小・中高校生100円。

室町時代の二服
茶臼^{ちやうす}で挽いたばかりの抹茶が
優雅な所作で供された。香り高
く、ほろ苦く、甘い。雪氷に倦^うん
だ眼に、抹茶の緑のなんとま
ぶしいことか。北国の春を寿^{ことほ}ぐ
一服を、上ノ国町にある国の重
要文化財 旧笹浪家住宅^{ささなみけ}でいた
だいた。ちなみにこれは日本文
化の体験メニューではなく、中世
室町時代の上ノ国で行われてい
た史実の体験である(要予約、
無料)。上ノ国町では、三つの城
館で茶が楽しまれていたのだ。
上ノ国町教育委員会事務局
社会教育担当局長の塚田直哉^{つくだなおや}
さんは、こう語る。「上ノ国には

(写真上) 写真手前が茶臼で挽いたばかりの抹茶。それを茶杓(ちゃしゃく)と茶筌(ちやせん)を用いて点(た)て、
来訪者をもてなしている。

(※)「蝦夷地」は江戸時代の北海道の呼称で、安土桃山時代以前は「夷島」と呼ばれていた。

文＝北室 かず子
写真＝田淵立幸



旧笹浪家住宅の中で、茶葉を茶臼で挽いて抹茶にし、それを点てて、喫する体験。旧笹浪家住宅は江戸末期に建てられた、北海道に現存する最古の民家だ。能登出身の笹浪家が鯨漁で繁栄した往時をしのびながら、格別の一杯が味わえる。体験は無料。☎0139・55・1165へ要予約。＼

はなざわだて、すざまだて、かつやまだて
花沢館、洲崎館、勝山館の三つの城館があり、各遺跡から茶臼、茶釜などの茶道具、中国や朝鮮半島の青磁、白磁、染付、赤絵、国内の窯では古瀬戸、瀬戸・美濃、珠洲、越前、信楽、唐津、志野などの陶磁器が出土しています。室町時代の上ノ国に茶を喫する文化があったことは間違いないでしょう。千利休が茶の湯を完成する前のことです」。

花沢館、洲崎館、勝山館は同時



瓦場遺跡

に機能することはなく、時代をまたいで存在していた。室町時代の夷島における和人の拠点としての重要性は認識されていたが、調査研究が進むにつれて、茶の文化など意外な面が見えてきた。なかでもアイヌが使っていた五百点余りもの骨角



器が出土したり、アイヌの墓と和人の墓が隣り合っていたことは歴史認識を大きく変えていく。

この時代に東北以北を統治していたのは、津軽半島の十三湖西岸の十三湊を本拠地とする豪族の安藤氏だ。安藤氏は室町幕府の蝦夷管領を任じており、十三湊は夷島の干鮭や昆布などの貴重な産物を京

都へ献上する拠点でもあった。十三湊遺跡からは鍛冶・製銅の工房、豪華な陶磁器などが発見されている。

一四五六(康正二)、現在の函館で和人の鍛冶職人がアイヌの青年を刺殺する事件が起きる。翌一四五七年にはコシヤマインの戦いが起き、道南にあった十二館のうち十館が陥落し、花沢館と茂別館

勝山館跡



愛知県尾張旭市出身。富山大学で青森県の十三湊を研究したことがきっかけで上ノ国町の職員となった塚田さん。



勝山館跡、洲崎館跡、空撮写真提供＝上ノ国町教育委員会

（現・北斗市）のみが残った。その争いを収束させたとして武田信広が、安藤氏に功績を認められ、安藤氏の家臣で花沢館主の蠣崎季繁の娘婿となつて家督を継いだ。この信広が松前家の祖であり、新婚の信広が築いたのが洲崎館である。一五四四年（永正十二）、二代蠣崎光広は松前の大館へ本拠を移し、勝山館と二館体制で夷島を統治する。そして一六〇四年（慶長九）、慶広が松前に改名し、徳川家康より黒

3城館が機能していた時代

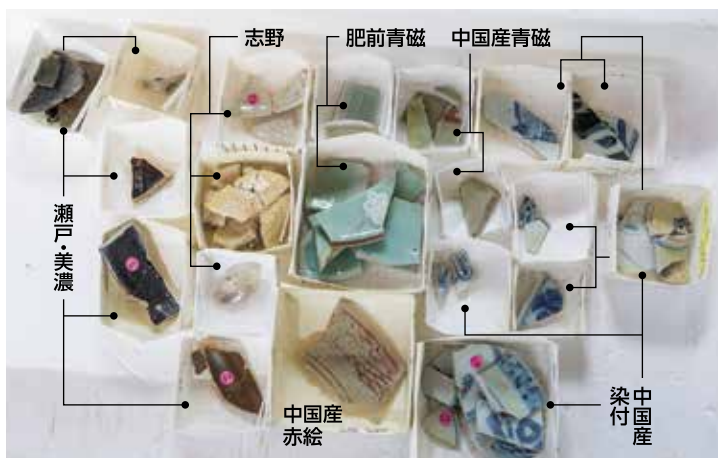
時代区分	室町	安土桃山	江戸
年代	1400	1500	1600
花沢館 (館主／蠣崎季繁)		(1432年～1462年頃)	
洲崎館 (館主／武田信広)		(1457年～1504年頃)	
勝山館 (館主／武田信広)		(1470年～1600年頃)	

懸仏と円空仏

上ノ国史の調査研究の拠点が、旧上ノ国中学校の木造校舎を活用した上之国館調査整備センターだ。

印状を賜つて松前藩が成立したのである。「松前藩は、信広の時代から自分たちがアイヌを治めてきたという、アイヌとの関係性に基づくサクセスストーリーを作ったといえます」と、塚田さんは語る。

昭和にタイムスリップしたときめきを胸に長い廊下を進むと、旧教室で五人の女性が黙々と作業をしていた。五人は発掘と資料整理のエキスパートであるのみならず、令和になつてから立て続けに大発見を成し遂げている。川口泰子さんはその瞬間をこう振り返る。「花沢館跡の発掘調査の時のことです。土をじょれんで均していると、何か引っかかるものが。緑色が見えたので石ではなく銅だなどと思う、塚田さん



花沢館跡、洲崎館跡、勝山館跡から発掘された陶磁器のかげら。塚田さんによると、流通拠点ほど瀬戸の陶磁器が多く搬入されているそうだ。「瀬戸物」が陶磁器の総称として日本語に定着している理由にあらためて納得。

（●は出土場所の目印として整理のために貼られたシール）



●上之国館調査整備センター／上ノ国町字大留
52 ☎0139-55-2228。8:30～17:15、土日祝日、
年末年始休館。入館無料。

を呼びました。上下逆さになった青銅製の懸仏^{かけぼつ}でした。懸仏とは、仏が衆生救済のために神の姿でこの世に現れる本地垂迹説^{ほんじすいせつ}を体現するもの。その懸仏は如意輪観音^{にょいりんかんのん}をかたどっており、六本の手で衆生を救うことから「六救さん」の愛称がつけられた。一方、洲崎館跡で懸仏を発掘したのは鈴木千春さんだ。「トレンチ（溝）の土を移植ゴテで軽く削る感じで動かしていたら、ぽんつとコテの面に何かが乗っかるように出てきたんですよ。あ、懸仏かなと思いましたが、鎧を着ていてびっくりました」。こちらの懸仏は毘沙門天^{びしゃもんてん}だった。鈴木さんの発見で、伝説の毘沙門堂の存在が実証された。

塚田さんいわく「城館が単なる見張りの拠点ではないことは明らか



発掘から整理まで、一連の作業を担うみなさん。「土中に何かあると気付く勘の鋭さ、集中力、一を言えば十を理解してくださる精鋭揃いです」と、塚田さんは全幅の信頼を寄せている。右から2人目が川口さん、3人目が鈴木さんで、ともにおよそ30年のキャリアを有する。上之国館調査整備センターにて。

かでしょう。勝山館の後方に位置する夷王山^{いおうざん}にはアイヌと和人の墓が約六百五十基もつくられた。夷王山墳墓群が確認されています。アイヌが和人と共生する理由として、従来は金属製品を入手しやすいなどの物質的メリットが挙げられることが多かったですが、真摯^{しんし}な祈りの行為そのものにシンパシーを感じ合っていたのではないでしょう。だからこそ共に活動し、隣り



←洲崎館跡から出土した
毘沙門天の懸仏。



←花沢館跡から出土した
如意輪観音の懸仏。

同士で墓を構築したのではと思うのです。昔の人々にとって、神仏は現代の感覚よりはるかに尊いものだったでしょう。江戸時代以降も古い寺社が大事に残されてきたことから、信仰心の篤い地域だということが改めてわかってきました。上ノ国の人々と円空^{えんくう}仏との関わりも、それを象徴しているかもしれない。円空上人^{えんくうしやうじん}は、江戸時代前期に

上ノ国の子どもたちと田中春彦氏がストーリーを考え、田中マリナ氏がイラスト・デザインを担当し、上ノ国観光ガイド協会から出版された絵本『六救さん』。歴史地域未来想像株式会社やまちが企画し、「ほっかいどう遺産WAON」助成事業で実現した。



瓦をたどって

さて、瓦といえば本州以南の建

全国を行脚しながら約十二万休めの仏像を彫った。道内で確認された四十数体のうち、道内唯一の十一面観音立像と阿弥陀如来像をはじめ、上ノ国には六体が現存している。明治時代の神仏分離令の際、人々が室に隠して仏像を破壊から守った。そうさせたのは、中世から脈々と流れる祈りの心ではなかったか。『SLAMDUNK』や『バガボンド』で知られる漫画家・井上雄彦さんも当地の円空仏に会いに来て、観音堂を守る上ノ国観音講の皆さんと交流したそう。



上ノ国町内に安置されている6体の円空仏のスタンプを、旧笹浪家住宅で押せる。写真は十一面観音のもの。



北海道唯一の十一面観音で、146.6cmの高さは北海道最大。旧笹浪家住宅所蔵。写真提供＝上ノ国町教育委員会



北海道ヘリテージマネージャー、NPO歴史的・地域資産研究機構技術専門員、(一財)北海道文化財保護協会会員としても精力的に歴史的建造物の保存活用に取り組む渡辺さん。

築材で、北海道には少ない印象がある。ましてや江戸時代にはきわめて希少と思っていたが、当時の瓦をめぐる状況に新たな知見を切り開いたのが、札幌在住の渡辺一幸さんだ。渡辺さんは伝統建築技能継承集団「建築ヘリテージサロン」副代表で、専門家として歴史的建造物の保存活用に尽力している。渡辺さんによると「江戸後期の巡検使(※)・古川古松軒の文章にこんな一節があります。『奥羽は寒国にして瓦よわきとて瓦ぶきの家なか

りしに、この町には瓦ぶきの家も土蔵もあり、如何の事にてこの所も寒強き地に瓦をもちゆることと思いにいずれも上方焼きの念入れし瓦ゆえに、寒風の強気にも損せず。この『上方焼きの念入れし瓦』とは、当時の輸送事情から敦賀または三國から積み出された越前赤瓦でしょう。越前系釉薬瓦は寒冷な気候に耐え、凍害による割れにも強いのが特徴です。そのうえ上ノ国、江差両地域にまたがる社寺造営工匠集団には、瓦師が存在していたことも、砂館神社の祈禱札などからわかりました。渡辺さんは、町内三十カ所で本州からの移入瓦と地元産瓦を巡った結果、北陸と石州(現・島根県)産の瓦が砂館神社周辺の民家に集中し、江戸時代末期の瓦もわずか

だが残っていることがわかった。『江戸時代に建った寺社や漁家では赤瓦がよく見られ、地元で焼かれた瓦の存在を示しています。赤瓦とは釉薬をかけた瓦で越前系釉薬瓦と同様、凍害に強く、東北や北陸の日本海側に多いものです。茅葺きや石置き屋根が一般的だった当時、赤瓦屋根は寺社が担う地域の精神的支柱の象徴として、また漁場経営者の威信を示すものとして意図的に用いられたのでしょう』と考察する。さらに住民への聞き取り調査で「瓦場」という地名が町内に存在する情報を得た。上ノ国町教育委員会が昨年三月に発掘調査を行った結果、「瓦場」で窯体片と越前系赤瓦を確認できた。地名の通り、瓦場遺跡が存在したのだ。瓦を焼く



洲崎館跡で出土した瓦。写真提供＝上ノ国町教育委員会

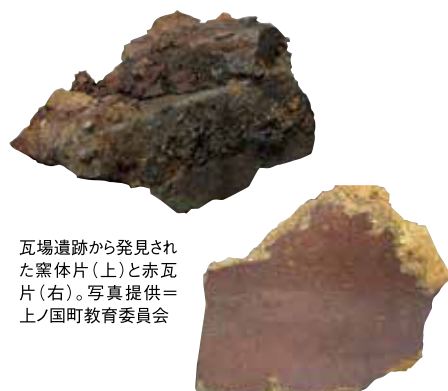


洲崎館跡に建つ砂館神社本殿。かつては瓦屋根だった。写真提供＝上ノ国町教育委員会

(※)幕府の命を受けて諸国を巡回し、政情、作物の豊凶などを視察した役職。

には原料土と燃料にする薪材の調達地が近く、消費地への運搬の便が良いことが重要だ。瓦場遺跡の十ノ圈内に鯀漁と日本海交易で栄えた江差がある。上ノ国への製瓦技術の伝播は、南加賀、能登、新潟、佐渡よりも早かったこともわかった。渡辺さんは「瓦という建築材料を紹介して、北海道西岸の継承すべき建築や歴史的景観の保全への手がかりとなれば」と言う。渡辺さんの研究内容は日本建築学会北海道支部で発表され、学会誌にも掲載された。

塚田さんと渡辺さんが師と仰ぐのが、上ノ国産瓦の調査を共に行った叡山学院教授で京都国立博物館名誉館員、僧侶の故・久保智康さん



瓦場遺跡から発見された窯体片(上)と赤瓦片(右)。写真提供＝上ノ国町教育委員会

だ。久保さんは、室町時代後期の城下町全体が遺跡になっている「二乗谷朝倉氏遺跡」(福井県)の調査委員でもあった。「古色を湛え星霜を重ねた建物はそのこと自体が美術性と時代性となりうる」との信念のもと、上ノ国の史跡調査に尽力しながら、昨年、急死された。厳しくも地域に寄り添う姿勢は上ノ国の歴史探究を照らし続けるだろう。

最後に訪れたのは、夷王山墳墓群の頂上付近にある勝山館跡ガイダンス施設だ。三方がガラス張り、斜面に広がる墳墓群を一望できる。館内には二百分の一の勝山館の復元模型や、墳墓の原寸大レプリカ、三城館の特徴をまとめたパネルなどが並んでいる。懸仏のレプリカを鏡面のようにピカピカに磨いて記念に持ち帰る体験もできる。

塚田さんは「北海道の中世は、縄文時代に比べると知名度は低いですが、当時の人々の活動の一端が明らかにするにつれ、アイヌ対和人という二項対立ではない多様な社会が見えてきます。アイヌと和人の土葬墓が隣り合って構築されている様子は、民族・文化・価値



「北の戦国時代」を体感できる勝山館跡ガイダンス施設。

●勝山館跡ガイダンス施設／上ノ国町字勝山427
☎0139-55-2400。10:00～16:00。4月第2土曜～11月第2日曜まで開館。月曜休館(祝日の場合は翌日休館)および祝日の翌日休館。大人200円、小中高生100円。

三城館をつなぐミュージアム建設が始動するという。それは歴史を見直し、未来を志向する基点となるに違いない。J



(左)花沢館跡は小さな公園になっている。近くには2017年に建て替えられた花沢温泉がある。(右)勝山館跡は散策路が整備されており、4月から5月にかけて桜の見ごろを迎える。写真提供＝上ノ国町教育委員会

